2022年12月11日　説教「たずね求める心」

マタイの福音書２章1～12節

先主日は、ミカ書５章から学びました。預言者ミカは紀元前約７００年の時代に、神の審判の宣告と、神の祝福や希望を語りました。５章においては、メシヤ（救い主）がベツレヘムに生まれるという預言を伝えさせられました。今朝からは、その預言の成就を含め、マタイの福音書２章を学んでいきます。

１．イエス・キリストの誕生（1～3節）

①ベツレヘム（１）**「イエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。」**時代は紀元前４年ほどだと考えられます。ユダヤの国はローマ帝国の属国となっていました。とはいえ、その国は王を立てて統治することが許されていました。当時の王はヘロデでした。一般的にはヘロデ大王を言われ、権勢を強めていました。その時代に、イエス・キリストはミカによって預言されたように、ベツレヘムに誕生したのです。さて、バビロニヤあたりだと考えられますが、ユダヤの東方の地に博士たちがいました。賢者とも訳せますが、彼らは占星学者でした。彼らがエルサレムにやって来たのです。

②その方の星を見て（2）**「『ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。』」**博士たちは言うのでした。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにいらっしゃいますか」。博士たちからすれば、王となる子が生まれるというのであれば、まずはヘロデ王のところに行くのが順当であると考えたのでしょう。彼らは東方で王となる人ことを示す星を見たので、礼拝にやってきたと告げたのでした。

③ヘロデ王（3）**「それを聞いて、ヘロデ王は恐れ惑った。エルサレム中の人も王と同様であった。」**しかし、これを聞いたヘロデ王の心中は穏やかではありませんでした。なぜなら、自分のあずかり知らないことだったからです。ヘロデは恐れ惑ったのです。自分の地位をおびやかす存在ならば、黙っているわけにはいきません。メシヤなる存在であっても、ユダヤ人たちが、その子を中心にまとまり反抗することを恐れました。エルサレムの人々も王と同じように恐れたとあります。民は民で、国に対立が生まれて不安定になり、庶民にも影響があると考えたのです。

２．生まれた子をめぐっての対応（4～8節）

①キリストの生まれる所（4）**「そこで、王は、民の祭司長たち、学者たちをみな集めて、キリストはどこで生まれるかと問いただした。」**民の祭司長や律法学者たちとは、旧約聖書に通じた人々です。ヘロ

デ王は彼らに、その王となる赤子の誕生について尋ねます。興味深いことは、ここですでに、王は「キリストがどこで生まれるのか」と尋ねていることです。彼は、どちらにせよ、力ある存在が生まれてくることを警戒していたのです。彼はメシヤをギリシャ語クリストスに言い換えて質問しています。

②預言書に（5～6）**「彼らは王に言った。『ユダのベツレヘムです。預言者によってこう書かれているからです。〖ユダの地、ベツレヘム。あなたはユダを治める者たちの中で、決して一番小さくはない。わたしの民イスラエルを治める支配者が、あなたから出るのだから〗』」**すると彼らはヘロデ王に、ミカ書 5 章 2 節を引用して、それがベツレヘムだと伝えます。ここで、イスラエルを治める支配者とあるのは、預言書通りです。一方ミカ書にベツレヘムを「最も小さい」とあるのに、ここでは「決して一番小さくはない」と言い換えられています。ベツレヘムに対する積極的なとらえ方ですが、イエスの時代でも力はありませんでした。

③ヘロデの思惑（7～8）**「そこで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、彼らから星の出現の時間を突き止めた。そして、こう言って彼らをベツレヘムに送った。『行って幼子のことを詳しく調べ、わかったら知らせてもらいたい。私も行って拝むから。』」**それを聞くと、ヘロデ王は博士たちを呼び付けて、その星が出現する時間がわかれば、自分も礼拝するということを理由にして、その子の様子についての情報を、帰り道に寄って、伝えるよう、頼んだのでした。

３．**博士たちは贈り物をささげて主を礼拝（9～12 節）**

①星の先導（9～10）**「彼らは王の言ったことを聞いて出かけた。すると、見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに幼子のおられる所まで進んで行き、その上にとどまった。その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。」**博士たちは、王から伝えられたことを聞いて、出発しました。すると、彼らが東方の国で見た星が彼らを先導してくれたのです。そして、幼子のいるところまで導かれ、星はそこで止まったのです。彼らは、それは神の導きであることを信じ、喜びました。

②救い主を礼拝（11）**「そしてその家に入って、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をささげて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。」**彼らが訪れた所は「家」とあります。キリストが生まれた所はルカの福音書 2 章を見ると、赤子が飼い葉桶に寝かせられたとあり、そこが馬小屋であることが暗示されています。しかし、ここは「家」とあります。ヨセフとマリヤは家を借りて住んでいたのでしょう。博士たちはそこに導かれたのです。そして、東方から運んできた宝物を、お祝いとしてささげました。黄金はさびず、光輝き、細工もできる重宝なもので、時代を越えて価値のある物です。乳香は王にささげる聖なる香りのもので、殺菌力もあると言われます。没薬は文字通り薬ですが、エジプトではミイラ作りにも用いられました。これらはどれも貴重なものでした。博士たちは、遠路これらを運び、救い主をを礼拝しお祝いをしたのです。

③直接、自分の国へ（12）**「それから、夢でヘロデのところへ戻るなという戒めを受けたので、別の道から自分の国へと帰って行った。」**博士達はもはやヘロデ王の所に戻るつもりはありませんでした。それは主なる神の促しでした。彼らは別の道を通って、自国へ帰っていきました。

《結論》アドベント（待降節）に今朝の聖書箇所を読むのは初めてかもしれま
せん。クリスマス礼拝で開くことが多いからです。

ミカ書 5:2 にある救い主はベツレヘムで生まれるという預言は成就したの
です。小さな存在であったベツレヘムが用いられたように、私達も小さな者たちでも主は用いてくださるのです。

次に覚えたいことは、ここで礼拝をささげている博士たちについてです。彼らはユダヤ人から見れば、異邦人でありました。確かに、知的には優れていましたが、神の民という眼から見れば、外国人です。そんな彼らが救い主の誕生を祝うという恵みに浴したということは驚きです。福音が異邦人に及んでいくというドラマを、私達は使徒の働きにおいて、詳しく見ることができます。しかし、イエスの弟子達ですら、異邦人が救われるということについて、半信半疑でした。そのうち、聖霊が異邦人のうちにはっきりと働いていることを彼らは見ました。コルネリオというローマの百人隊長と周りの人々に、使徒ペテロにより福音が語られると、聖霊がくだりました。彼らはイエス・キリストが主であることを信じました。ペテロは、神が異邦人を招いてくださっていることを確信しました（使徒 10 章）。その後は地中海世界の多くの異邦人が救われて教会が建て上げられていった事はご存じの通りです。三人の博士はその先駆けのようにして、救い主の誕生を祝い、礼拝したのです。ここに神の異邦人への恵みを見ることができます。私達も異邦人クリスチャンとして、神の民としての救いの喜びを確かめ、この国の民への福音伝道に進みたいものです。

三番目に教えられることは、この三人の博士たちの真摯な求道の姿勢です。この三人は東方の地おいて、救い主の誕生を聖書の預言の書を通して教えられ、ベツレヘムまでの遠い旅をも辞さずに進んできました。それは単なる好奇心でありましょうか。興味があるという程度では、こうした行動はとてもできないと思います。なぜなら、彼らが越えなければならないのは、沙漠の原でありました。渇きによ

る命の危険もあります。しかし、彼らはどうしても真実を確認したかったのです。自分の利益のためではありませんでした。救い主と出会う価値のゆえに、高価な宝物である黄金、乳香、没薬を携えていったのです。本気の真理探究でした。主は彼らのそうした心を用いてくださり、救い主の誕生の祝いと礼拝に導いてくださったのです。

横田早紀江さんは、長女のめぐみさんを新潟在住時代に、拉致されました。狂ったようにめぐみさんを捜す日々であったということです。そうした時に、教会に導かれ、ヨブ記を読み始めたそうです。一般的には難しいと言われる書ですが、自分の立場とかさなって、理解が与えられ、読まされていったそうです。それぐらいに、魂が渇いていたのでありましょう。早紀江さんはクリスチャンになって、洗礼をうけるに至りました。三人の博士の求める心にも相通じます。ある牧師が言いました。「私達は一生求道者です」と。クリスチャンも、求道する心をいただいて、キリストの福音の恵みをもっともっと知っていきたいと思うのです。わかったなどと思わずに、真理の深みを求め、深い喜びと感謝をいただいていこうではありませんか。